

資料2：医師国家試験制度改善委員会報告書

昭和60年10月 厚生省

はじめに

医学教育及び適正な地域医療の確保のそれぞれの立場から、卒前医学教育及び卒後医学教育の現状とあるべき姿を踏まえて、医師国家試験の改善を行うことが必要であるとする各方面の提言を受けて、医師国家試験制度改善委員会は、昭和57年11月に発足した。爾来、当委員会は医師国家試験のあり方及び改善方策について、長期的、総合的視野に立った検討を行い、昭和58年5月に当面改善すべき事項について意見をとりまとめたが、この提言は、幸にも、医療に深い関心を寄せる人々の賛同を得、昭和60年春の医師国家試験より実施された。当委員会は改善に向けての準備作業の要所要所でその進捗状況の報告を受けるとともに、さらに、今春の試験終了後改善の状況について評価を加え、その結果、提言はほぼ満足できる程度まで実施されたと判断した。

しかしながら、国家試験の重要性を鑑みると検討すべきことはなお少なくないと思われる。当委員会は、今後さらに改善に向けて検討を行うべき事項について討議を行ったが、次の諸点について意見の一致をみたので報告する。

1. 第79回医師国家試験（昭和60年春）における改善の実施

医師国家試験制度改善委員会中間意見書（昭和58年5月）において、当委員会は、当面早急に行うべき改善事項として、①問題作成プロセスの改善、②試験問題のプール制導入、③医師国家試験出題基準（ガイドライン）の改善、④昭和60年からの改善実施に合わせた試験の年1回化、⑤医師国家試験についての調査・研究の必要性の5項目を提言した。

当委員会は、昭和60年から実施された改善状況を評価するとともに、来年度以降も改善項目を盛り込んだ国家試験が引き続き実施されるよう求めるものである。

実施された改善の具体的な事項は以下のごとくである。

1) 問題作成プロセスの改善

ア 試験委員の増加

イ 試験委員出題打合せ会（試験委員の問題作成技法向上のためのワークショップ）の実施

ウ 試験問題の事後評価を実施し、その結果を打合せ会の検討材料とすることによって、次回以降の出題の改善

エ 内容面では、科目間で十分に調整した基本的臨床

知識・技能に関する問題解釈、解決能力を問う問題の増加

オ 問題数の増加とともに試験日数の延長

2) 試験問題のプール制導入

ア 内科、外科、産婦人科、小児科、公衆衛生の5科目及び臨床実地問題について既出問題よりなる試験問題プールの作成

イ コンピュータによるプール問題検索システムの開発

ウ 出題問題の10%程度がプール問題からそのままあるいは一部修正して出題

3) 医師国家試験出題基準（ガイドライン）の改善

全面的改訂が行われ、その際、次の事項が配慮された。

ア 科目間の調整

イ 基本的臨床知識・技能を重視した内容の精選

ウ 総論索引の作成

エ 臨床実地への出題範囲の明示

オ 邦文・欧文索引の作成

カ 原案段階での医育機関アンケート実施

2. 今後の検討課題

医師国家試験が医師として具有すべき基本的な知識・技能を問う試験であるためには、卒前・卒後の医学教育の動向を十分に踏まえつつ時代の要請に応えうる適切な試験となるよう今後も絶えず改善が図られなければならない。そのためには、今回実施した種々の改善の影響を体系的に評価できるようになった時点で、再び改善のための検討を行う必要がある。その際には、以下に述べる課題が検討項目に含められる必要がある。

1) 出題科目の検討

現在の医師国家試験においては、内科、外科、産婦人科、小児科及び公衆衛生を必須科目と称し毎回出題する反面、精神科、皮膚科、放射線科、整形外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、眼科を選定科目と称して内科系から1科、外科系から1科を毎回選定して国家試験科目としている。今後は、基本的臨床知識・技能の重視の観点から、何を問うべきかを十分吟味することを前提として、出題科目を漸進的に全科目とすることについて検討する必要がある。

2) 医師国家試験出題基準の改善

当面、引き続き科目間の不均衡の是正を図るが、臓器別あるいは系統別構成を採用できるか否か、医育機関に

おける教育の現状に十分配慮しつつ検討する必要がある。

3) 試験問題形式の開発

問題の形式等については、今回の改善の趣旨を踏まえた分かりやすい設問が今後も維持されるよう留意するとともに、思考過程を重視する問題の比重を増やすべきであり、その具体的方策を検討する必要がある。

4) 試験問題のプール制の改善

プール制については、プール問題の増加を図りつつ、全科目において、プール由来問題が出題できるようにする必要がある。併せて、出題数の増加、合否基準の検討を前提としてプール由来問題数(現在は出題数の約10%)の増減について検討する必要がある。

5) 試験問題数の増加

試験の信頼性を高めるために出題数の増加について検討する必要がある。

6) 合否判定基準の検討

我が国の医師国家試験においては、絶対基準(あるいは一定点数以上を獲得したものを合格とする)を採用しているが、アメリカにおいては、相対基準(他の受験生と比べてある割合以上の席次の者を合格とする)が、採用されている。

試験問題が適正に作成され、誤りなく採点されたとしても、合否基準が適切でなければ試験全体としては妥当性を欠くこととなる。

しかしながら、合否基準の問題は、試験の目的、内容、信頼性、客観性、プール問題の割合などと密接な関係を持つため、多角的かつ慎重な検討が必要である。又、1回の試験結果に基づいて資格を認定する場合と、他の評価の機会がある場合とでは、合否基準の設定の仕方も変わるものと考えられるが、現状では卒直後に行われる医師国家試験のみをもって生涯にわたる医師の資格を付与しているという前提を踏まえて検討せざるを得ない。

当委員会としては、種々の判定基準(MPLを含む)について検討を行うほか、内外の専門家からの意見聴取、厚生科学研究による委託研究等の医学教育研究の結果を参考とした。これらによって、合否基準を考える際考慮すべき要因が明らかになったが、現在の基準をしいて変更する積極的な理由を見い出せなかったため、当面は現行基準を維持することとした。

今後は、合否基準と試験内容の改善をそれぞれ独立したのものとしてではなく総合的視野に立った妥当な合否判定基準を見出すための検討が必要である。

7) 医師資格評価の複数化

現行の医師国家試験では医療の現場に第一歩を踏み出す、すなわち適切な指導者の下で臨床研修を行う知識・技能を有するか否か、評価することを主眼としている。生涯にわたる医師の教育・研修を適切に評価するという観点から、ある一定期間以上の臨床研修後、独立して診療を行える能力があるか否かを改めて評価する必要性の有無及びその実施内容・体制について、検討する必要がある。

8) 試験結果の還元

現行国家試験においては、試験結果は「合否」の発表というかたちで医育機関及び受験者へ示されている。

今後、教育評価の観点からの結果の還元については、正解の公表が及ぼす影響を考慮し慎重に検討をすべきである。

9) 受験回数制限

医学部を卒業後、相当期間臨床を離れている者が仮りに合格しても医師として十分活動できるかどうかとの指摘があった。このため、卒業後相当年を経過した者についても無制限に受験を認めるかどうか検討する必要がある。

10) 試験結果発表の迅速化

合格発表の迅速化については、免許取得者が円滑に臨床研修を始められるためにも必要である。遅くとも5月の連休明けには合格発表がなされるよう事務処理の合理化を図る必要がある。

11) 医師国家試験についての実施・研究体制の充実

医師国家試験向上のため、国家試験の実施体制及びそれを支える研究体制の充実に図り、試験の研究が試験の実施に反映され易いシステムを確立する必要がある。検討課題として、試験業務の電算処理化、試験問題の質のモニタリング法、新たな問題形式の開発、プール問題の管理などがある。将来的には、継続的に国家試験の実施及び研究を行うための常設機関(国家試験センター)の新設について考慮する必要がある。そのため、当面、アメリカ、西ドイツなどの国家試験実施・研究機関と連携を深め情報の体系的収集を図る必要がある。

おわりに

昭和57年11月以来、10回にわたり会議を重ねた結果、当委員会は以上のような合意に達しひとまず幕を閉じることとした。今回の改善が、我が国の医療を担う医師の資格認定の手法としての医師国家試験に改善をもたらし、この努力が今後も引き続き関係者によって続けられていくことを期待するものである。

表 医師国家試験の変遷

		第 1 期			第 2 期			第 3 期			第 4 期	第 5 期
回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
年	昭 21	昭 22	昭 23	昭 24	昭 24	昭 24	昭 24	昭 28	昭 32	昭 43	昭 43	昭 49
基礎医学	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目
臨床医学	9	9	9	11	11	11	11	4	4	4	4	5
	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目	科目
臨床実地問題	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
計	17	17	17	19	19	19	19	8	6	6	7	7
	39	38	38	49	49	49	20	16	15	15	160	190
解答	全問	全問	全問	選	選	選	選	選	選	全問	全問	全問
	全問	全問	全問	選	選	選	選	選	選	全問	全問	全問
筆論	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
客観式	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
実地(口頭試験)	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
年間試験実施回数	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1
1回の試験実施日数	筆記 3 日	筆記 3 日	筆記 3 日	筆記 3 日	筆記 3 日	筆記 3 日	筆記 3 日	筆記 2～4 日	筆記 1 日及び口頭試験 2～4 日	筆記 1.5 日	筆記 2 日	筆記 2 日